

# 論文の和文要旨

論文題目	グスタフ・シュペートにおける言語と文化の哲学の構想		
しめい 氏名	き 木	べ 部	たかし 敬

## 0. 本論文の目的と構成

哲学とは何か。この問いに対しては、実に様々な答えがありえよう。だが、答えの一つに、「存在に関する思索」があることは確かであろう。思うに、諸々の問題の中でも、「存在」は最も根本的な問題である。というのも、問題とみなされる物事はすべて、存在するからこそ、問題とみなされうるのであり、存在しなければ、問題とみなされることもありえないからである。「存在に関する思索」は伝統的に「形而上学 (metaphysics)」と呼ばれてきた。

哲学の歴史において、近代西欧の懐疑論 (特にイギリス経験論) の登場は大きな事件であった。この懐疑主義は、既存の伝統的な形而上学を徹底的に批判し、その結果、後者はもはやそれまでどおりの形では存続しえなくなったのである。しかし、形而上学的思索の頓挫は、根本の探求の断念を意味する。近代的懐疑の後、いかにして「存在に関する思索」を継続するか、これが以降の哲学にとっての最大の問題の一つになった。

以上は主に西欧を念頭に置きながらなされた話である。だが、近代西欧の懐疑論の影響は、西欧以外の諸地域にも波及した。それらの地域における伝統的な形而上学も破壊され、こうして、そこでも「存在に関する思索」の維持が大きな問題として意識されるようになった。

本論文の目的は、20 世紀ロシアの哲学者グスタフ・グスタヴォヴィチ・シュペート (Густав Густавович Шпет, Gustav Gustavovich Shpet 1879-1937) の思索の研究を通じて、ロシアにおける近代的懐疑克服の試みの一端を理解することにある。

本論文は以下のように構成される。

第1部は「生涯と思想の概観」と題され、次の三つの部分からなる。①生涯、②先行研究史、③思索の時期区分と思想の全体像。③において我々は、シュペートの思索を、1) 修学期 (1901年—1910年)、2) 構想期 (1910年—1916年)、3) 展開期 (1917年—1929年) に分ける。その上で我々は 2) 構想期のみを考察を限定する。その理由は、近代的懐疑を受容し、そして、これを解決するための構想を得るという筋道が、この時期に鮮やかに見られるという点にある。

第2部では、構想期に属するシュペートの著作が検討される。いくつかの中から、次の三つの著作、①「ヒュームの懐疑論と独断論」(1911年)、②「心理学の一つの道、それはどこへ通じるのか」(1912年)、③『現象と意味』(1914年)が選出される。これらはそれぞれ、①懐疑の受容、②構想の兆し、③構想の提示にあたる。

## 1. 生涯

シュペートは、1879年4月、キエフで生まれた。

1898年、彼は聖ヴラジーミル大学(キエフ大学)の物理・数学部に入学する。だが、それと同時にマルクス主義の政治活動に関わり、これが理由で放校される。

しかしながら、1901年、シュペートは、同大学への再入学を許可される。ただし、今度は歴史・文学部に入る。これとともに、G. I. チェルパーノフ(Г.И.Челпанов, G.I.Chelpanov)の「心理学ゼミナール」に参加し、そこで認識論および近代西欧哲学史の学習を進める。1905年、同大学を卒業。卒業論文は、『ヒュームとカントにおける因果性の問題 —カントはヒュームの疑念に答えたのか』。1907年、彼はモスクワに移り住む。また、1910年以降、モスクワ大学、高等女子学校などで教鞭をとる。

1910年および11年の夏の数ヶ月、シュペートはベルリンで国外研修を行う。これに続き、1912年から13年の間、ゲッチンゲン大学で研修を行い、そこでE. フッサール(E. Husserl)の講義やゼミナールに出席、現象学から影響を受ける。1913年秋に帰国、ロシアへの現象学(『イデーンI』)の紹介に努める。1914年、『現象と意味 —根本学としての現象学とその諸問題』を発表。1916年、学位論文を提出し、モスクワ大学助教授に就任する。

1917年の革命以降、シュペートは様々な分野で活躍する。1918年、モスクワ大学教授就任。1919年から20年にかけて、「モスクワ言語学サークル」に参加、R. O. ヤコブソン(Р.О.Якобсон, R.O.Jakobson)らに影響を与える。1921年、モスクワ大学での教職から追放されるが、同年、科学的哲学研究所の初代所長に就任。また、同年、ロシア芸術学アカデミー(後の国立芸術学アカデミー)の会員に選出され、22年以降、同アカデミーの哲学部門を指導、さらに24年から、同アカデミーの副総裁を務める。この時期の著作として、『美学断章』第1—第3部(1922年—23年)、『民族心理学序説』第1部(1927年)、『言葉の内部形式 —フンボルトを主題とする練習曲と変奏曲』(1927年)など多数。

1929年、政府により国立芸術学アカデミー解体。シュペートは、同アカデミーで反ソヴィエト的集団を指導したことを責められ、哲学に関わる活動を禁じられる。1935年、逮捕され、エニセイスクへ流刑。1936年、トムスクに移る。1937年10月、再逮捕され、11月16日、銃殺。

## 2. 構想期の著作

### ①「ヒュームの懐疑論と独断論」(1911年)

シュペートは自身の哲学的問題を、ヒュームの認識論上の懐疑を受容することによって明確化

した。

形而上学は、存在するとは、特定の何かのみが真に存在し、他のすべてはそれに依存している、ということであるとみなし、真に存在するものの探求に努める。しかし、この探求は、様々な種類の真に存在するものを提出するばかりで、一向に意見の一致を見ることがなかった。そこでヒュームは、真に存在するもの全般を否定しようとする。しかし、これは、すべては真に存在するのではない、世界はすべて虚構なのだ、と言うに等しい。ヒュームはこの考えに満足することができない。しかし、同時に彼は、形而上学に回帰することも望まない。こうして、彼はジレンマに陥ることになる。

しかし、シュペートは、ヒュームが徹底して懐疑したことを高く評価する。シュペートの考えでは、例えばカントは、因果律の客観的妥当性を認めた点で不徹底であり、古い型の形而上学を克服し切れていない。

## ②「心理学の一つの道、それはどこへ通じるのか」(1912年)

シュペートは、ジレンマ解消の方策を探して、彼にとっての同時代の心理学(認識論)の広範な研究に向かう。そして、彼はその方策を主客対立図式の廃棄に見出す。

普通、客観的なものとは、真に存在するものであり、一方、主観的なものとは、真に存在しないものである(主観こそが真に存在するという説もあるが、これにおいては、客観がむしろ真に存在しないとされるのであり、つまり、普通と逆に考えられているだけである)。したがって、客観と主観との区別が完全に取払われたならば、その時には、真に存在するものと真に存在しないものとの差別が撤廃され、すべてが真に存在することになる。

シュペートはこの発想を W. ジェームズ (W. James) や H. ベルクソン (H. Bergson) の思想、そして特に W. デイルタイ (W. Dilthey) の記述心理学から得ている。また、シュペートは、P. D. ユルケーヴィチ (П. Д. Юркевич, P. D. Yurkevich)、V. S. ソロヴィヨフ (В. С. Соловьев, V. S. Solov'ev)、L. M. ロパーチン (Л. М. Лопатин, L. M. Lopatin)、S. N. トルベツコイ (С. Н. Трубецкой, S. N. Trubetskoj) など、19 世紀後半および 20 世紀初めのロシアの哲学者たちのうちにも、同様の発想を見出している。

## ③『現象と意味』(1914年)

シュペートは、『イデーニ I』におけるフッサールの志向性概念を支持する。なぜならば、志向性は主観と客観の不可分離性を含意するからである。しかしながら、シュペートは、フッサールが現象の向こう側に対象自体を認めていること、また、意識の統括者として“私”を認めていることを指摘し、彼が主客対立図式から完全には脱却できていないとする。シュペートは、フッサールの意識観から対象自体(「X」)および統括者(「純粹自我」)を払拭する。しかし、その場合には、諸々の現象は、いかなる客観的実体も、いかなる主観的作用もないままに、統一となり、秩序をなすのでなければならない。どうして、そうしたことが可能なのか。シュペートは、現象が言葉であるからだ、と答える。言葉としての現象にあっては、すべてが有意味であり、ということはすなわち、すべてが真に存在する。ここに彼の言語と文化の哲学の構想が成立する。